

病院内の特別支援学級における音楽授業実施の試み — NPO 法人による鑑賞学習支援の導入に焦点をあてて —

藤原志帆^{*1}・真隅 潔^{*2}

An Attempt at Introducing Music Courses in Hospital-Based Special Needs Classes: Focusing on the Introduction of Support for Music Appreciation by NPOs

Shiho FUJIHARA and Kiyoshi MASUMI

はじめに

病気で入院している子どもたちは、病院に隣接した特別支援学校、病院内に開設された特別支援学校の本校・分校・分教室、病院内に開設された小中学校の特別支援学級などで学習する機会が多い。また、病棟や病室内で特別支援学校の訪問教育を受けることもある。

それぞれの場所で個々の実態に即して無理のない指導が行われているが、病気の状態や学習環境などにより、体験的な学習を多く含む音楽の指導は十分に実施できない場合も多い。

第2筆者が代表を務める特定非営利活動法人 OnPal は、福岡を中心に入院児を対象とした音楽活動を展開している。OnPal が新たに A 地域で活動を始めるにあたって、第1筆者は、特別支援教育における音楽指導を研究する研究者の立場から、A 地域の教育現場とのコーディネーター役を務めた。

201X 年から、A 地域の B 病院と C 病院に開設されている D 小学校の特別支援学級（病弱・身体虚弱）において、OnPal の鑑賞学習支援を導入した音楽の授業実施の準備を始めた。

本稿では、NPO 法人による鑑賞学習支援の導入に焦点をあてて、201X+1 年に病院内の特別支援学級（以下「院内学級」とする。）で実施した音楽授業の概容、成果と課題について報告する。1 章を第2筆者が、その他を第1筆者が担当している。

1. 特定非営利活動法人 OnPal の音楽授業

1) OnPal の活動

特定非営利活動法人 OnPal は、2013年4月に活動を開始し、同年12月に法人認証を受けた団体である。

OnPal は、病気と闘いながら入院生活を送る子どもたちを始め、病気、高齢などで元気をなくしている人々に、身近に音楽を楽しむ機会を提供し、音楽が持つ力によって元気になっていただく活動を目的としている。また、活動に参加する音楽家やアーティスト、コーディネーターたちが優しさを共有し、新たな活動の場が広がり、私たちのまちが音楽あふれる心豊かなまちとなることを目指している。さらに、わが国では音楽療法すらまだ十分認知されておらず、病院内で時折行われるコンサートなどもボランティアに頼っているのが実情である。OnPal では、活動の実践を通じて、わが国の病院がもっと音楽やアートなどの芸術文化活動を、病院の中に積極的に取り入れる日が来ることを願って活動している。

- ・どのような時でも音楽はみんなを笑顔にすることができる。
- ・病気で入院生活を送る子ども達もきっと音楽があれば元気になってくれる。
- ・音楽が持つ不思議なエネルギーを信じて OnPal に集まった音楽家たち。
- ・私たちのまちが音楽あふれる心豊かなまちになることを願って活動している。

以上が、OnPal の活動ポリシーである。

OnPal の活動は、2006年12月、九州大学病院小児医療センターのリニューアルに携わったデザイナーによる「子どもにやさしい病棟はできた、次は子どもを元気づける活動が必要」との呼びかけで始まったデザインと音楽による「元気アートプロジェクト」の活動に遡る。当初は九州大学病院のみで活動していたが、OnPal 設立とともに活動対象を、福岡市立こども病院、福岡大学病院などに広げ、201X 年に A 地域の B 病院と C 病院を追加、現在は11箇所の病院での活動を予定している。

入院している子どもを対象とした OnPal の活動

*1 熊本大学大学院教育学研究科

*2 特定非営利活動法人 OnPal

は、「音楽授業」と「コンサート」に大別される。この2つの大きな違いは、「音楽授業」は院内学級の正式な授業として実施するもので、院内学級を所管する小学校、中学校の許可の下に行われる。一方「コンサート」は、病院のロビーやプレイルームで行うことが一般的で、病院の許可が必要となる。

そこで、「音楽授業」の相談は直接院内学級の教師と行うことが一般的であるが、病院側が全く関与しない所もあれば、総務部門がサポートする所など、病院によって取り扱いが異なる。

「コンサート」は病院の総務部門と協議しながら活動を進めているが、病院によってそれぞれルールが異なっており、活動をスタートさせる時は十分注意が必要である。一般的には、ボランティア登録、ボランティア活動申請など色々な書類の提出を求められる。

尚、初めての病院で活動を希望する場合、院内学級の所管校や病院に、まず OnPal の活動について説明を行い活動への理解を求めるが、これがなかなか難しく、この段階で理解をいただけず活動を断念した病院もある。

2) OnPal による音楽授業の特徴

長期入院者への学校教育の継続を目的に設置されている「院内学級」は、学校から派遣された専任の教員が学年の違う子どもを対象にすべての科目の授業を行っており、教員への負担が大きく十分な学習環境を整えることは難しい状況に置かれている。

このような中で、OnPal が行う院内学級の小中学生を対象とする音楽授業は、毎回違う楽器のプロの音楽家を派遣し、「演奏を聴く」「楽器のことを勉強する」「楽器をさわって音を出してみる」などの体験型授業を行っている。

病気の子どもの対象とした音楽授業は、健常な子どもを相手にする活動にはない、健康上の配慮や、元気のない子どもを相手にする難しさなどがあるが、OnPal では、演奏を聴かせるだけでなく、楽器クイズで楽器のことを勉強したり、楽器を触り、演奏するなど、通常の学校でも体験できないような、子ども達がわくわくする授業を行い、子どもの学習意欲を高めている。

特に人気が高いのは、楽器を触り演奏する授業で、ハープやお箏は弦をはじくだけで音が出るし、ヴァイオリンやチェロも弓でこすれば音が出るので特に難しい準備は必要ない。しかし、フルートやオーボエといった管楽器は、衛生上の理由から口をつけさせることができないので、OnPal では、特製のストローオーボエやアクリル管フルートを製作して児童

生徒全員に配って音の出るしくみを学ばせている。音が出たときの子どもたちの喜びようはとても感動的である。

また、入院生活では友達や学校の先生方と接する機会も限られるため、会話の機会が非常に少ないことも特徴の一つと考えられる。音楽家とのやり取りは、子どものコミュニケーション能力や感性を育てる効果も期待でき、将来こども達が成長した時に心豊かな人間として成長するための一助になればと考えている。

尚、子ども達からは「つらい治療を頑張っているご褒美をもらったようだ」「ストレスを忘れ感動して涙が出た」などの感想が寄せられ、また院内学級の先生方からは「院内学級という限られた環境で困難を感じている中、OnPal のお陰で教育環境を整えて頂き感謝している」「音楽授業に参加するために治療も頑張っって体調にもより一層気を配るというモチベーションにつながっている」「音楽にかかわり、明るく潤いのある特別な一日になっている」というような感謝の言葉が寄せられている。

【活動の準備フロー】

- ①音楽授業やコンサートの企画スタート（年間計画に基づいて）
- ②講師や出演者の選定
- ③病院や施設と講師や出演者の日程調整
- ④講師や出演者による音楽授業やコンサートの内容検討
- ⑤音楽授業やコンサートの内容の決定
- ⑥授業のテキスト、クイズの制作
- ⑦院内学級で準備してもらおう用具等の依頼（電子ピアノ、パソコン、ディスプレイなど）
- ⑧音楽授業の実施・活動記録書の作成

2. 院内学級における音楽授業の概容

1) 第1回目の音楽授業

201X年6月に、B病院とC病院の院内学級において、福岡の演奏家を講師に招き、OnPalの鑑賞学習支援（OnPalの音楽授業）を導入した音楽授業の実施を試みた。さらに、201X年10月には、A地域の講師候補の演奏家も参加して、福岡の演奏家を講師とするモデル授業と音楽授業の説明会を行った。

そして、201X+1年からはA地域の講師による音楽授業を実施することになり、201X+1年6月に、D小学校において音楽授業に関する打ち合わせを行った。D小学校の教頭、D小学校の院内学級担当者、OnPal代表（第2筆者）、演奏家代表（A地域演

奏家コーディネーター)、大学教員(第1筆者)が出席して、院内学級のニーズ、OnPalの活動理念を共有し、授業内容、各回の打ち合わせや振り返りの方法などについて話し合った。この打ち合わせは、教育現場のニーズに即した音楽授業を展開するために、前述したこれまでのOnPalの活動フローに新たに加えたものである。

① 授業内容と参加者

201X+1年6月に、B病院とC病院の院内学級において、フルート奏者とピアノ伴奏者が講師を務め、OnPalの鑑賞学習支援を導入した音楽授業を実施した。B病院については、院内学級の教室で音楽の時間に実施した。C病院については、院内学級の授業時間外の設定となったため、病院のプレイルームで病棟の行事の一環として実施した。

プログラムを次に示す。「色々なフルートを聴いてみよう・触ってみよう」というテーマで、フルートによる演奏の鑑賞をメインとして、クイズや演奏体験、合唱を加えた構成となっている。「C. フルートの仲間たち」では、バスフルート、アルトフルート、フルート、ピッコロの4種類の楽器を講師が吹き分けて、参加者に楽器の種類と音色の違いを伝えた。「D. フルートのように音を出してみよう」では、参加者がアクリル管フルートやストロー笛を演奏して、音が出るしくみを楽しく学んだ。

【第1回目授業のプログラム】

A. オープニング

「アルルの女よりメヌエット」

B. フルートってどんな楽器

フルートクイズ

C. フルートの仲間たち

「動物の謝肉祭よりゾウ」バスフルート

「七つの子」アルトフルート

「くまんばちの飛行」フルート

「口笛吹きと犬」ピッコロ

D. フルートのように音を出してみよう

アクリル管フルートの演奏

E. もう一度曲を聴いてみよう

「美女と野獣」フルート

F. 一緒に歌おう

「花は咲く」

B病院における参加者は、小学生3名、小学校教員1名、保護者1名である。その他に、OnPal関係者3名、音楽教育を学ぶ大学生1名、大学教員(第1筆者)1名が運営や参観という形で加わった。

C病院における参加者は、小学生5名、幼児3名、

小学校教員1名、病棟保育士2名、保護者多数、病院スタッフ多数であった。その他に、OnPal関係者3名、特別支援教育を学ぶ大学生5名、大学教員(第1筆者)1名が運営や参観という形で加わった。C病院における音楽授業は、病棟のプレイルームで実施したことから、院内学級関係者以外も数多く参加して、コンサートのような雰囲気となった。

② 参加者の感想

個人情報保護の関係から、授業に参加した児童・生徒や保護者の感想に焦点をあてるのが難しいため、本稿では、院内学級担当教員や講師・参観者の感想を紹介し、授業の概容を伝えることとする。

授業実施後、院内学級担当教員、外部講師、参観者に、「A. 今回の取り組みにおける新たな発見や学び」、「B. 今回の取り組みでよかったと思うこと」、「C. 今後取り組みを考える場合、工夫してみたいと思うこと」、「D. その他」の4点について自由記述を求めた。回答を次に示している。院内学級担当教員の感想は、そのまますべてを記載している。講師・参観者の感想については、回答者の表現を損ねないように、類似した記述をまとめて記載している。「講師・参観者の感想」について、講師のみの感想文章の最後には「(講)」と加え、講師と参観者の感想文章の最後には「+(講)」と加えている。参観者のみの感想文章には何も加えていない。

【院内学級担当教員の感想】

A. 新たな発見や学び

- ・子どもたちは皆すばらしい演奏に聴き入っていた。なかでも〇年生の子が体をゆらして実に楽しそうに演奏を聴いていたのが印象的でした。
- ・ちょうど内容的にも小学生に合っていて、楽しんでいたようです。

B. よかったと思うこと

- ・聴くだけでなく、子どもの体験があったこと。
- ・選曲がとても良かったと思います。

C. 今後工夫してみたいと思うこと

- ・子どもたちが一緒に楽しめる活動があると嬉しいです。
- ・大学生等も入られるのも楽しいかもしれません。

【講師・参観者の感想】

A. 新たな発見や学び

- ・入院児が集中して楽しそうに音楽を聴く様子を見ることができた。+(講)
- ・フルート演奏の幅広さを知った。改めて音楽のよさに気づかされた。+(講)
- ・院内学級の雰囲気や在籍児の様子を知ることができ

た。

B. よかったと思うこと

- ・入院児が生演奏を聴き、楽器に触れる機会がもてた。+（講）
- ・クイズやアクリル管フルートの演奏体験で、子どもたちがフルートの歴史やしぐみを学べた。+（講）
- ・様々な種類のフルートによる演奏を聴くことができた。
- ・演奏者がドレスを着ていて視覚的に楽しむことができた。

C. 今後工夫してみたいと思うこと

- ・子どもたちが演奏する機会を増やしたい。+（講）
- ・歌いやすい雰囲気を作るために、歌の活動の前にレクチャーを入れてみるのもよいと思う。歌いやすいように移調して演奏するとよいと思う。
- ・クイズのスライドを大きく示すとよいと思う。

2) 第2回目の音楽授業

第2回目の音楽授業実施前に、院内学級担当教員と第1筆者で打ち合わせを行い、子どもの参加予定人数と学年を確認した上で、講師（演奏家）が提案した演奏曲目や授業時間について、子どもの実態に即して検討した。その後、講師と第1筆者で調整を行い、合唱曲を子どもが歌いやすい（小学校の共通教材である）「もみじ」に変更し、子どもの体調に配慮して全体の授業時間を短縮することとした。

① 授業内容と参加者

201X+1年10月に、両病院の院内学級において、クラリネット奏者とピアノ伴奏者が講師を務め、2回目の音楽授業を実施した。

プログラムを次に示している。「クラリネットってどんな楽器？」というテーマで、クラリネットによる演奏の鑑賞をメインとして、クイズや演奏体験、合唱を加えた構成となっている。「A. オープニング」では、講師がクラリネットを吹きながら会場に入室する演出を行った。「B. クラリネットってどんな楽器」では、「くまんばちの飛行」と「亜麻色の髪の乙女」の演奏でクラリネットの多彩な音色を参加者に伝えた。「C. クラリネットの音の出るしくみを知ろう」では、「インマー・クライナー」で、クラリネットを小さく分解しながら演奏する演出を加えて参加者にクラリネットの構造を伝えた。また、体験コーナーで、参加者がクラリネットのキーを押さえて、講師と共同での演奏を体験した。「E. 一緒に歌おう」では、第1回目の授業の感想を踏まえて、子どもたちが歌う意欲を高め、合唱の楽しさを体験できるように、大学生が、歌詞から情景をイメージしたり、二部合唱を体験する演出を考えた。

【第2回目授業のプログラム】

A. オープニング

「クラリネット・ポルカ」

B. クラリネットってどんな楽器

「クラリネットをこわしちゃった」

クラリネットクイズ

～クイズに答えて、クラリネット博士になろう～

「くまんばちの飛行」

「亜麻色の髪の乙女」

C. クラリネットの音の出るしくみを知ろう

「インマー・クライナー」

体験コーナー

～クラリネットを触ってみよう～

D. もう一度曲を聴いてみよう

「チャルダッシュ」

E. 一緒に歌おう

「もみじ」

B病院における参加者は、小学生2名、中学生1名、小・中学校教員2名、保護者3名である。その他に、A地域演奏家コーディネーター、特別支援教育を学ぶ大学生7名、大学教員1名（第1筆者）が運営や参観という形で加わっている。

C病院における参加者は、小学生1名、中学生1名、幼児3名、小・中学校教員2名、病棟保育士2名、保護者多数、看護学生5名、病院スタッフ多数であった。その他に、A地域演奏家コーディネーター、特別支援教育を学ぶ大学生8名、大学教員（第1筆者）が運営や参観という形で加わっている。

授業の様子を図1から4に示している。



図1：鑑賞と演奏体験（B病院）



図2：合唱（B病院）



図3：鑑賞（C病院）



図4：合唱（C病院）

② 参加者の感想

授業実施後、院内学級担当教員、講師・参観者に第1回目と同様の内容について自由記述を求めた。回答を次に示している。最後に、授業実施日の院内学級児童の絵日記（図5）も掲載している。

【院内学級担当教員の感想】

A. 新たな発見や学び

- ・子どもたちがクラリネットについてじかに見れてよくわかったと思います。

B. よかったと思うこと

- ・クラリネットがだんだん短くなって演奏された所。
- ・音楽にとっても興味がある子がすごく楽しんでいました。
- ・リズムのよい親しみやすい曲が多くて小学生の子

もが楽しめたこと。

- ・すごく近距離で、すばらしい演奏を聴けたこと（前回も）。
- ・リコーダーとの比較があったこと。
- ・実際にリードを触らせてもらっておみやげとして頂けたこと。
- ・子どもたちにこやかに話かけられたこと（前回も）。
- ・大学生の参加（季節を感じることでできない病院にあって「もみじ」の題材がよかったです）。

D. その他

- ・辛い治療が続く子どもたちにとって、そして付き添われている保護者にとってもすてきな時間だったと思います。
- ・準備（会場設営）等ありがとうございました。学生さんの協力で助かりました。
- ・できれば授業及び帰りの会をした後に会場設営、演奏会、或いは午後からだバタバタせずに済みそうです。

【講師・参観者の感想】

A. 新たな発見や学び

- ・子どもたちが知っていると思っていた歌について、知らない子が多く驚いた。自分の中で常識を作らないようにしたい。（講）
- ・院内学級や小児病棟の雰囲気、院内学級在籍児の様子を知ることができた。
- ・入院児が楽しそうに音楽を聴く様子、意欲的に発言する様子を見ることができた。
- ・音楽授業が、限られた空間で生活している入院児への刺激、新しいことを学ぶ機会になると感じた。
- ・音楽授業が入院児の家族や医療者の癒しにもなると感じた。
- ・クラリネット奏者の演出（分解しても音が出る演出）や配慮（後ろの席の子どもに近づいて楽器に触れさせる）を知ることができた。
- ・心理的な安定、リラックス効果など、音楽のもつ力を改めて感じた。
- ・実体験の大切さを改めて感じた。

B. よかったと思うこと

- ・子どもたちがクラリネットのリードを持ち帰ることができた。（講）
- ・入院児がプロの生演奏を聴き、楽器に触れる機会ももてた。
- ・クイズで子どもたちがクラリネットについて詳しく知ることができた。
- ・演奏者がドレスを着ていて、ホールでのコンサートを病院で体験することができた。
- ・演奏者の演出（演奏しながら登場する、クラリネッ

トを分解して演奏する、子どもたちに柔らかい表情で話しかける)で、演奏を楽しむことができた。

- 歌をうたう場面があったこと。
- 「もみじ」から子どもに思い浮かぶ事項を発言させることで、情景を思い浮かべながら歌うことができた。
- 「もみじ」の二部合唱で副旋律を聞きながら歌う経験ができた(歌うのをやめてしまった子もいたが)。
- プレイルームでは、色々な場所(演奏者の前の観客席、後方の床スペースなど)で演奏を聴くことができ、多様な参加の仕方があった。

C. 今後工夫してみたいと思うこと

- 歌唱場面で、活動進行者と伴奏者の打ち合わせを行う必要がある。(+) (講)
- 演奏体験で、クラリネットに初めて触れる子どもたちがキーを抑えやすいように工夫する必要がある。(+) (講)
- 子どもたちが楽器を演奏する機会を取り入れたい。
- 参加者全員が交流する音楽活動を取り入れたい。
- 低学年の子どもに馴染みのある曲、リクエスト曲、J-POPを取り入れるのもよいと思う。
- 歌唱場面で(今回の「もみじ」の場合)、本物のもみじやかえでを提示して、歌の情景をイメージさせるのもよいと思う。
- スライドの文字にふりがなをつけるとよいと思う。

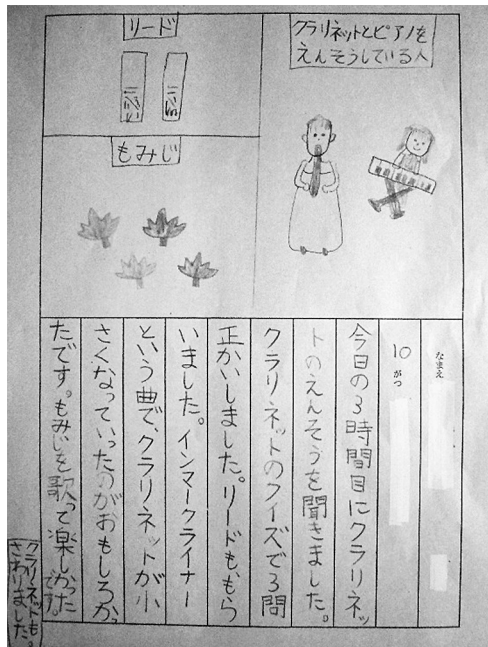


図5：院内学級在籍児童Eさんの絵日記

3. 成果と課題

1) 成果

OnPalの鑑賞学習支援(OnPalの音楽授業)を院内学級の音楽授業に導入することで、病気で入院し

ている子どもたちは、病院の中で、生演奏を聴き楽器に触れる機会のある音楽の授業を受けることができた。また、子どもと一緒に参加した入院児の家族も、授業に参加する子どもの姿に笑顔を見せ、通常の病院とは異なる空気を味わっているように見受けられた。

前章の参観者の感想からも読みとれるように、OnPalが届けるプロの演奏家による音楽や演出、クイズや演奏体験を含むプログラムが、子どもたちの笑顔を引き出し、学習意欲を高めたと考えられる。

現行の特別支援学校学習指導要領において、病児の子どもたちへの教科指導の配慮事項として、「体験的な活動を伴う内容における指導方法の工夫」に関する項目が新設され¹⁾、院内学級における体験的な学習活動が入院児の学習意欲を向上させ、体調に良い影響を及ぼしたという報告もあがっている²⁾。しかし、体験的な学習は、「病状による活動制限」、学校や病院の「設備や体制の問題」、³⁾「児童生徒の個々の実態への配慮」などの制限が伴い、実施に難しさを抱えているという現状も指摘されている³⁾。

また、特別支援学校の新学習指導要領において、上述の「体験的な活動を伴う内容における指導方法の工夫」について、「間接体験や疑似体験、仮想体験等を取り入れる」ことが示された⁴⁾が、音楽活動の醍醐味は、身体に伝わる振動や、同一空間における聴衆と演奏者、演奏者同士のコミュニケーションから感じる部分も大きい。

このような状況を踏まえると、院内学級において体験的な学習を多く含む音楽授業を実現させるために、OnPalのような社会資源の力を借りることも、有効な方法の一つとして考えられる。

2) 課題

第1筆者は、OnPalの鑑賞学習支援を院内学級の音楽授業に導入する際に、教育現場のニーズを大切に、可能な限り入院児の実態に即した授業が実現するようにコーディネートを試みた。

今後、さらに入院児の実態に即した音楽授業を展開するために、前章の参観者の感想にみられる工夫(子どもの主体的な音楽活動を増やす、子どものニーズに即した楽曲を選ぶなど)を試みる場合には、外部講師を招いた授業でも、企画から実施の段階まで、院内学級担当教員が中心となって進めるような実践のあり方も必要になるのではないかと考えている。

坪能(2019)は、音楽の授業における学校と社会の連携の現状を踏まえ、教員と子ども、学校が主体的に関わり、学校外の人々や組織からの支援を得ることができる実践のあり方を考え、TASモデルを提案している⁵⁾。TASモデルとは、Teacher(=T)を

授業者として位置づけ、Adviser (=A) としての音楽の専門家（研究者や作曲家等）の知見をもとに、Supporter (=S) が授業を自らの音・音楽によって支える演奏家として参加するという3者の協働による新たな授業のあり方を成立させる試みである。

院内学級では、入退院により在籍児の入れ替わりが多く、病状の変化や治療計画から急に授業に参加できなくなる場合もあり、当日授業に参加する子どものニーズに即した授業を行うには、卓越した対応力が求められる。在籍児を熟知する院内学級担当教員が中心となって、外部講師の力を借りながら音楽授業を運営することにより、可能な限り子どもの実態に即して体験的な学習を行う音楽授業の実現が可能となるのではないかと考える。

おわりに

本稿では、NPO 法人による鑑賞学習支援の導入に焦点をあてて、院内学級で実施した音楽授業の概容、成果と課題について報告した。今後も、教育現場のニーズを丁寧に聴取しながら、入院児の実態に即した音楽授業が実現できるように、様々な連携のあり方を検討したいと考えている。

謝 辞

絵日記の掲載についてご快諾いただきました院内学級のEさんおよび保護者の方、授業の実施にご協力いただきました小学校の先生方および病院関係者のみなさまに心より感謝申し上げます。

付 記

OnPal による音楽授業は、日本財団, ToothFairy, 公益社団法人日本歯科医師会, 福岡市 NPO 活動推

進補助金, 九州ろうきんの助成を受けて行っている。また、本実践に関する取り組みの一部は、JSPS 科研費 JP18K02582の助成を受けて行ったものである。

注および引用

- 1) 文部科学省 (2010) 『特別支援学校幼稚部教育要領 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領 特別支援学校高等部学習指導要領』海文堂出版, p.116.
- 2) 有馬美幸・涌井剛・高野美幸 (2018) 「院内学級における体験的な学習活動に関する教員への質問紙調査」『特殊教育学研究』56(4), pp.199-207.
- 3) 土屋忠之・武田鉄郎 (2011) 「病院内教育における小児がんや慢性疾患の児童生徒に対する『体験的な活動を伴う学習』に関する研究」『特殊教育学研究』49(1), pp.51-59.
- 4) 文部科学省 (2018) 『特別支援学校幼稚部教育療養 特別支援学校小学部・中学部学習指導要領』海文堂出版, p.80.
- 5) 坪能 (2019) は、『音楽の授業づくりジャーナル』2, p.1 (<https://www.icme.jp/>) において、音楽の授業における学校と社会の連携の現状を「2000年代に入った頃から、すでにプロの音楽家や音楽団体、あるいは公共文化施設などが多くの教育プログラムを展開し、学校における支援活動を広げてきている。しかしこうした活動では、学校側が主体的にプログラムに参加すること、あるいは音楽の教師たちが積極的に関わる場を見ることは少ない、あくまで演奏者、あるいは様々の社会的な団体主導のイベントとして行われているのである。また活動の内容も、教科書の鑑賞曲を演奏するなど以外は、学校の音楽科教育、あるいは学習指導要領と直接つながる内容は多いとは言えない。つまり学校が様々な社会的な団体と関わりを持っているといっても、それが音楽の授業を中心とした学校の教育課程に結びついていることはほとんどない」と述べ、TAS モデルを提案している。